

5 芭蕉生家

五 芭蕉生家

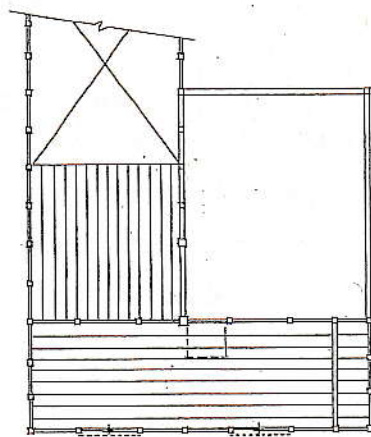
上野市 上野市赤坂町 町屋 江戸時代末期

切妻造 棧瓦葺

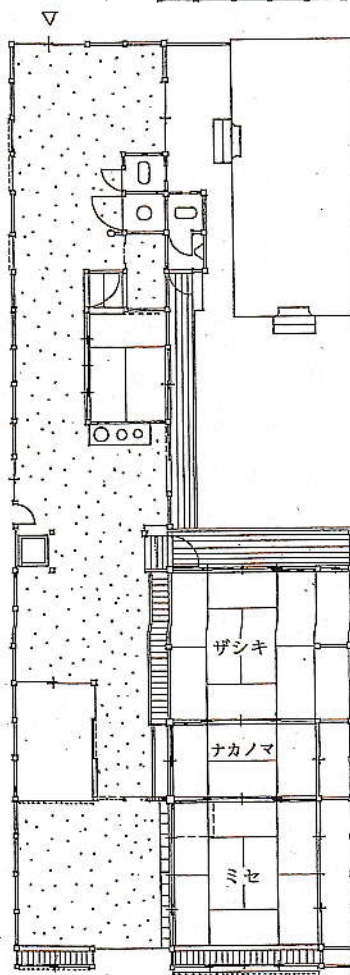
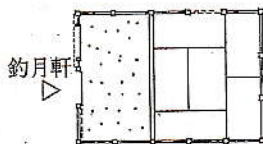
上野市指定史跡 昭和三十年(一九五五)八月二十五日指定

この家は上野城下町の東北の出入口に当たり、町屋と下級武士、農家が混在する赤坂町に所在する。芭蕉の父松尾與左衛門が柘植(現伊賀町)から当地に移住した後、芭蕉の兄半左衛門の住居となり、さらに明治時代まで代々、松尾家の住居となっていたという。芭蕉の生家とされるが、芭蕉の生誕地にはほかに伊賀町柘植の説もある。敷地には主屋のほか、土蔵と切妻造棧瓦葺の小建物があり、この小建物は芭蕉が郷里の伊賀に滞在中に利用した庵に擬せられ、整備されて釣月軒の庵号が掲げられている。

この家は平入の町屋の形式をもち、北側に一列にミセ、ナカノマ、ザシキの三室を並べ、南側は通り土間とし、土間は中戸で前後に二分する。土間は角屋となつてさらに背後まで長く延び、三畳の小間や雪隠、風呂はこの角屋部分を占める。ナカノマが四畳と小規模であることや、ザシキに床、棚、平書院や内法長押が備えられ、整った書院座敷となつていこと、ナカノマとザシキの境に板欄間を入れることは、この家の特色となつてい。二階は表の奥行二間分



二階平面図



一階平面図

参考文献

『上野の町家と町並み』 京都府立大学

大場研究室 上野市 平成十年

をミセから梯子などで出入りするつしとして、奥とは土壁で仕切り、中戸の奥の通り土間の上部も大半を土間から昇降するつしとしている。
小屋組は三通りの桁行梁上に登梁を架け、母屋桁を支える単純で疎らな構造であり、二階の居室的な利用は未発達であるものの、棟高は高い。表の建具は、現状では土間側・ミセ前面ともに出格子であるが、当初は土間側は摺上戸、ミセ前面は雨戸となつていた。
また、つし二階には格子窓と引違戸の組合せが用いられる。

大きな改変は見られず、洗練されよく整った意匠をもつ町屋であるが、建築年代は芭蕉生家の説にかかわらず、主屋・釣月軒ともに江戸時代末期とみられる。



外 観

文場での教育は講堂での一斉の講義を主体とするもので、講堂は教師の講席となる後室のほか、内室、三方の入側、廻廊に区分されていた。生徒は講堂正面の三か所の木段から出入りし、身分、階層によって聴講場所を使い分けたと見られる。北控所は東北隅の一〇畳が藩主の控所に、他の各室は督学、武芸目付、講官など上位の教師の控所とされていた。東控所は番所休所とされていた。

小玄関は、隔年一回の藩主の臨校の際の御成玄関である。玄関は教師の控所や台所頭などの事務職の部屋が連なり、正面の式台玄関は教師や事務職の出入りに用いられたのであろう。台所には広間と手附役手代の詰所、土間、風呂などがある。表門は通用門であり、ベンガラ塗を施すことから赤門と通称された。当初、表門の南面は、門口の西側には壁がなく、通りに開放されて伴待となっていた。思斉舎は読書作文の学寮であったが、一五歳以下の年少の生徒の学寮である有恒寮の跡地に移築改造され、現在は有恒寮と称されている。

参考文献

『史料 旧崇徳堂保存整備事業 第1期工事保存修理工事報告書』上野市教育委員会 平成六年

『史料 旧崇徳堂保存整備事業 第2期工事保存修理工事報告書』上野市教育委員会 平成一三年

表虫庵 上野市西日南町 江戸時代後期 (三重県指定有形文化財(史跡名勝))

表虫庵は、松尾芭蕉の門人、服部土芳の営んだ庵であり、庵号は芭蕉の「表虫の音を聞に来よ草の庵」の句に基づくものと伝える。土芳は藤堂藩士で、半左衛門と称したが、芭蕉の門人となつてからは仕官を辞

し、俳諧に専心した。伊賀における芭蕉ゆかりの草庵としては、表虫庵のほか、瓢竹庵、東麓庵、西麓庵、無名庵があり、伊賀五庵と称したが、いずれも衰退し、表虫庵のみが現存する。

表虫庵の創建以来の経過については、資料に乏しく、不明の点が多い。貞享四年(一六八七)に着工(五庵図録)、翌元禄元年(一六八八)に完成(表虫庵)したと伝えるが、一方、元禄元年に焼失し翌年再建(永保記事略)とも、元禄一二年(一六九九)に焼失(序事類編、庵日記)とする資料もある。土芳は享保一五年(一七三〇)に没し、その後庵は荒廃するが、安永三年(一七七四)築山桐雨が庵を再興(表虫庵再興之記)した。天明年間の桐雨の没後、庵は再び荒廃するが、文化七年(一八二四)に服部猪来が庵を再々興している(表虫庵小集)。

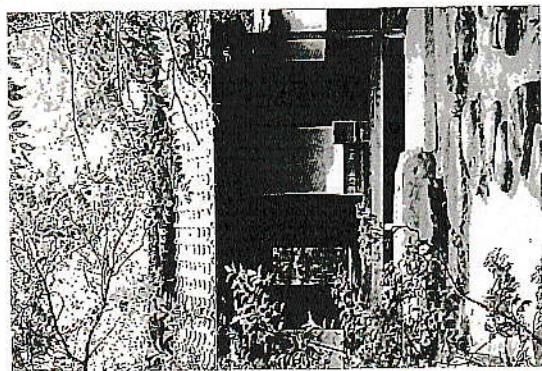


写真563 表虫庵外観

明治以降も、敷地所有者は変転するが、とくに昭和初年の菊本直次郎所有の時期に庵の整備が進み、南門、中門、茶室(昭和三年)、芭蕉堂(昭和三年)、表門が建築されるとともに、庭園も整備された。このように表虫庵は創建以来の変化がはなはだしく、近世に遡る建築は、庵と同名の主屋表虫庵のみである。

主屋表虫庵は南から六畳、四畳、板間および土間が連なり、六畳の南と東、板間の西には縁が取り付け。屋根は寄棟造茅葺で四周の庇を桧瓦葺とする。この建

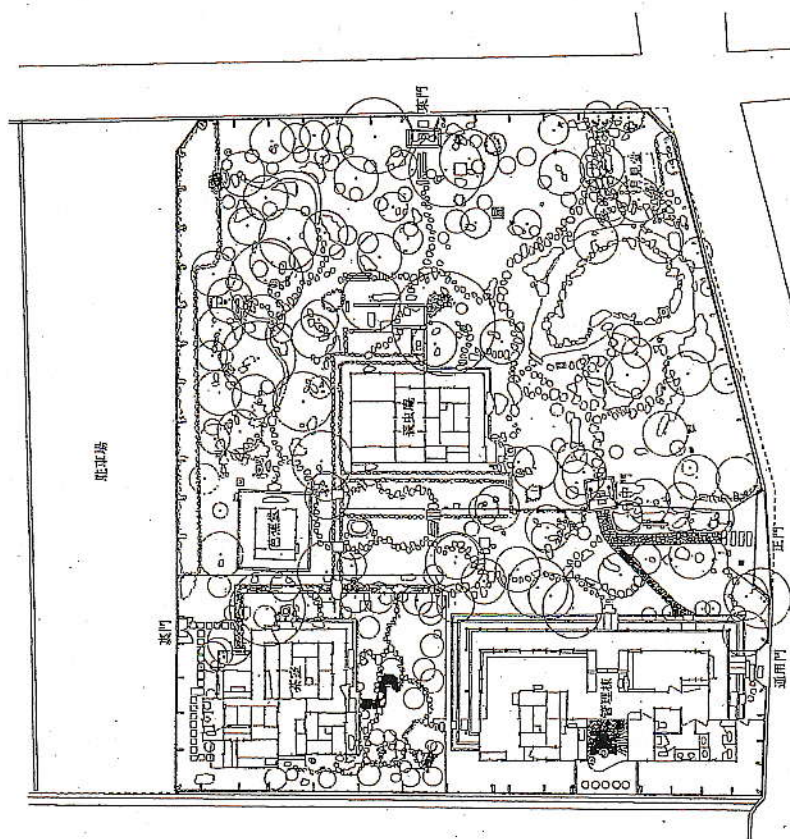


図77 養虫庵配置図 (1:500、『三重県指定文化財 養虫庵修理工事報告書』から)

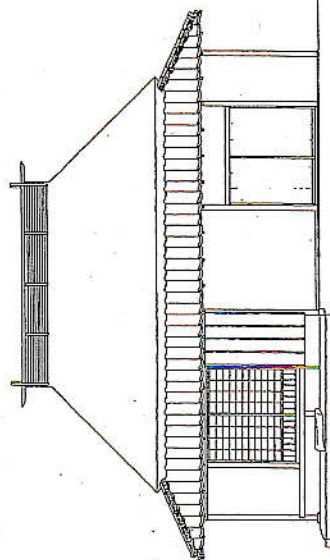


図78 養虫庵立面図 (1:150、『三重県指定文化財 養虫庵修理工事報告書』から)

物の建築年代の特定はできないが、文化七年の服部猪来の再興、もしくは安永三年の築山桐雨の再興に関連することが想定される。

芭蕉堂は、養虫庵の北方で、東面する方形平面の小堂で、室形造茅葺、九尺角の平面を畳敷とし、傘天井とする。その背面側に二尺の葺き下ろし部分を張り出して、木造の芭蕉像を安置する。昭和三年（一九二八）の建築であり、棟梁は森本源吉であった。

参考文献

『三重県指定文化財 養虫庵修理工事報告書』上野市 平成六年

旧入交健久家住宅

上野市相生町 文化一四年～文政二年（三重県指定文化財）

入交家は藩堂藩の武士であり、同家住宅は「拝領屋鋪居宅新建物帳并絵図入」によれば、六代目の入交勘平成直の時に屋敷替えがなされ、文化一四年（一八一七）から文政二年（一八一九）にかけて、銀およそ六貫目で建て替えられたものである。相生町は三之町通りの東端近くを占める町で、江戸後期には武家屋敷と町屋の混在する地域であった。旧入交家住宅は敷地の北面が三之町通りに面しており、通りには棧瓦葺の長屋門とともに、棧瓦葺の町屋ぶうの養屋が

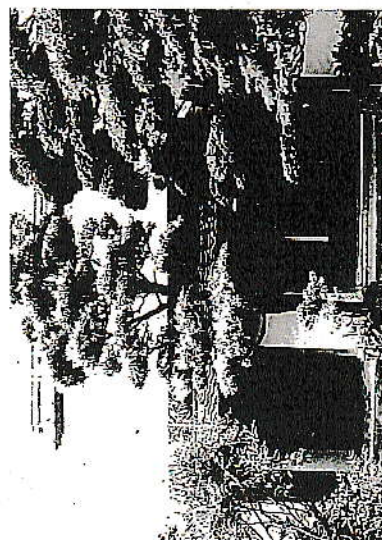


写真564 旧入交健久家住宅主屋外観



INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPAN ICOMOS NATIONAL COMMITTEE
c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
2-5-5-13F, Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo Japan 101-0003
Tel & Fax: +81-3-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org

報道機関 各位

報道発表資料

日本の 20 世紀遺産 20 選の選定について

日本イコモス国内委員会

報道用説明会の開催日 12月8日(金) 16:00~17:00

場 所 工学院大学新宿校舎 1317号室

〒163-8677 東京都新宿区西新宿 1-24-2 TEL.03-3340-0120

本件に関する問い合わせ先

後藤 治 (日本イコモス国内委員会 20 世紀遺産 20 選選定 WG 主査)

工学院大学 TEL.03-3340-0120 ogoto@cc.kogakuin.ac.jp

山名善之 (日本イコモス国内委員会 20 世紀国内学術委員会委員長)

東京理科大学 TEL.090-5572-6874 atelieryamana@outlook.jp

矢野和之 (日本イコモス国内委員会事務局長/文化財保存計画協会)

日本イコモス事務局 TEL. 03-3261-5303 jpicomos@japan-icomos.org

報道機関 各位

このたび、日本の 20 世紀遺産 20 選を（別紙 1）の通り、選定いたしましたので、報告いたします。

ユネスコ世界文化遺産に関する諮問機関であるイコモス（ICOMOS／国際記念物遺跡会議、International Council on Monuments and Sites）は文化遺産に関わるさまざまな課題や問題について、それぞれの分野ごとに国際学術委員会（ISC）を設置して取り組んでいます。そのひとつに 20 世紀の文化遺産（以下、「20 世紀遺産」と略す）の様々な課題について議論する 20 世紀国際学術委員会（ISC20c）があります。20 世紀遺産は文化遺産に関わる NGO の DOCOMOMO（Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement）等の活動により近代建築運動の建築作品の文化遺産としての価値がひろく認められるようになり、「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動における顕著な貢献」をはじめ著名な建築家による建築作品が世界文化遺産に登録されてきました。一方、世界文化遺産に登録された 20 世紀遺産が著名な建築家による建築作品に偏っている状況を受けて、20 世紀遺産の多様性についての議論の必要性が 2010 年頃から指摘されはじめました。そこで、ISC20c に委員として常時出席する 30 か国ほどの国にあるイコモス国内委員会に置かれた対応組織である 20 世紀国内学術委員会（NSC20c）に対し、課題の議論を促進するために各国の 20 世紀遺産を 20 件、写真と共に提出することが求められました。これを受ける形で、日本イコモス国内委員会では、2013 年より 20 世紀国内学術委員会（NSC20c／主査：山名善之）においてこの課題に取り組むことを開始し、「日本の 20 世紀遺産 20 選 WG」（主査：後藤治）を設置し、これまで議論を重ねてきました。

このたびその議論の結果がまとまり、イコモス国内委員会理事会において、その選定が了承されましたので、ここに発表する次第です。

別紙 1 のリストには、既に世界文化遺産となっている原爆ドームの範囲拡大の提案を含むため、合計で 21 か所の文化遺産が記載されています。各遺産の次に示した一文は、WG が選定の根拠とした理由です。各遺産の最後に示したローマ数字の番号は、世界遺産に推薦する際に根拠となる評価基準である「顕著で普遍的価値（Outstanding Universal Value）」（別紙 2）の該当番号です。

各遺産の詳細については、日本イコモス国内委員会ホームページをご参照いただけますと幸いです。

なお、各遺産に示したコアゾーン（構成資産がある地域）、バッファゾーン（遺産の景観等に配慮する緩衝地域）は、世界遺産の推薦にあたって設定する必要があるゾーニングです。本来このゾーニングは、文化財としての保護の範囲、景観上の規制や都市計画上の措置に基づいて決定されるものです。今回示したゾーニングは、そうした法的措置とは無関係に、想定される範囲の一案として示したものです。したがって、実際の推薦を行う場合には、より厳密な検討が必要になります。

(別紙1)

日本の20世紀遺産20選

- ① 広島平和記念資料館及び平和記念公園／第二次大戦からの復興・原爆ドームのエクステンション／IV、VI
- ② 上野恩賜公園と文化施設群（表慶館、東京国立博物館本館、国立科学博物館、東京文化会館他）／境内から公園へ／II、IV
- ③ 国立代々木屋内総合競技場／大規模空間建築の傑作／I、IV
- ④ 立山砂防施設群／水系一貫の総合的砂防システム／IV、II、V
- ⑤ 黒部川水系の発電施設群／自然と一体化した電源開発の究極／IV、II、V
- ⑥ 瀬戸大橋／橋技術のシンボル／I、II
- ⑦ 青函トンネル／世界最長の海底トンネル／I、II
- ⑧ 舞鶴の海軍施設と都市計画／生き続ける軍都の格子状街路と赤煉瓦の施設群／IV
- ⑨ 南禅寺界隈の近代庭園群／琵琶湖疏水を活用した20世紀の和風庭園・住宅群・都市周縁部開発／V、IV
- ⑩ 隅田川橋梁群と築地市場他を含む復興関連施設群／関東大震災からの復興施設と近代橋梁群による隅田川の景観／IV、VI
- ⑪ 迎賓館赤坂離宮／明治の近代化における洋風建築と迎賓館への保存再生／II、IV
- ⑫ 聴竹居／伝統を生かし、近代の環境工学の思想を取り入れた傑作／I、II
- ⑬ 箱根の大規模木造宿泊施設群／日本古来の伝統構法を生かした温泉旅館建築と景観／III、IV
- ⑭ 肥薩線（旧鹿児島本線）／黎明期鉄道技術（英独米）の日本的展開／V、II、IV
- ⑮ 鶴岡八幡宮境内の旧神奈川県立近代美術館／社寺境内に挿入されたモダニズム建築の代表／IV、I
- ⑯ 有田の文化的景観/町並、産業・文化施設群／20世紀に継続発展した伝統産業景観の代表／V、III
- ⑰ 旧朝倉邸と代官山ヒルサイドテラス／近代建築理論の具現化と民間による都市周縁部開発／II、IV
- ⑱ 小岩井農場／欧米牧畜業の近代技術を導入し営まれ続けている農場コミュニティの景観／V、II
- ⑲ 西条の酒造施設群／20世紀に継続発展した伝統産業景観の代表／V、III
- ⑳ 東海道新幹線／高速・大量輸送旅客鉄道システムの原点／I、IV
- ㉑ 伊賀上野城下町の文化的景観／旧城下町の都市景観にあわせた近代建築群の代表例／V、IV

(別紙2)

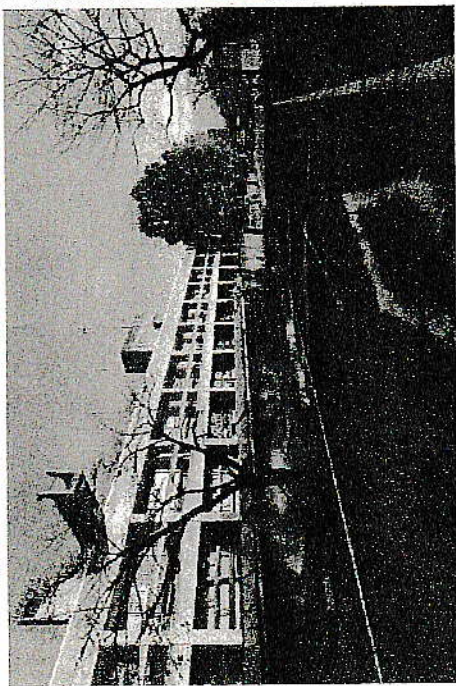
世界文化遺産選定のための評価基準

- (i) 人類の創造的才能を表す傑作であること。
- (ii) 建築や技術、記念碑的芸術、都市計画、景観設計の発展に関連し、ある期間にわたる、又は世界のある文化圏における人類の価値観の重要な交流を示していること。
- (iii) 現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは少なくとも稀な証拠を示していること。
- (iv) 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、建築的又は技術的な集合体の類型、景観に関する顕著な例であること。
- (v) あるひとつの文化（または複数の文化）を代表する伝統的居住形態、土地利用、若しくは海洋利用の顕著な例であること。又は、人類と環境との相互のかかわり合いを代表する顕著な例であること。特に抗しきれない変化によりその存続が危ぶまれているもの。
- (vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）

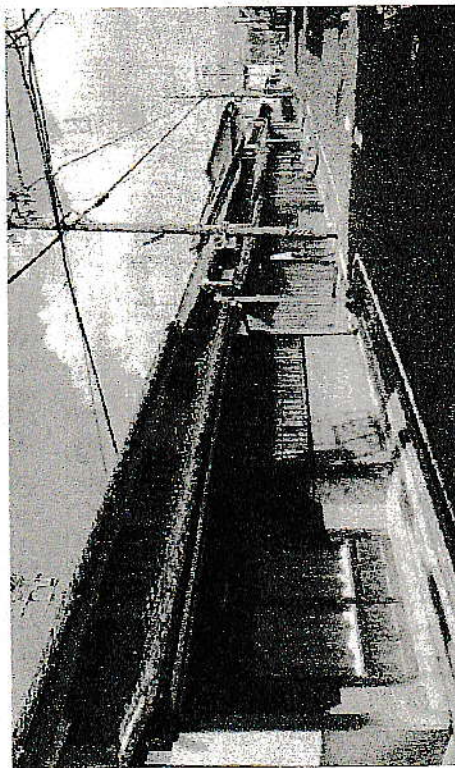
20世紀遺産・20選
ICOMOS ISC20c
Japan

②伊賀上野城下町の文化的景観

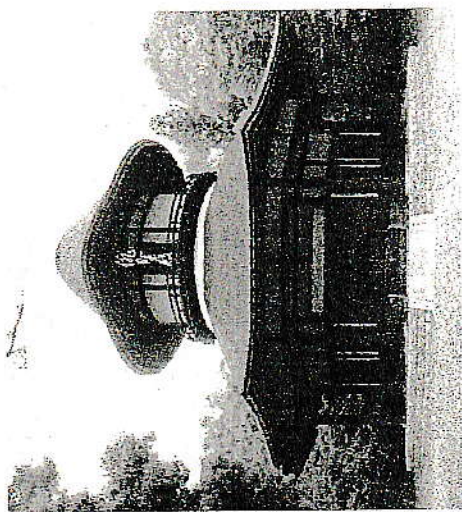
[旧城下町の都市景観にあわせた近代建築群の代表例]



旧上野市庁舎 (1964)



旧上野城下町



俳聖殿 (1942)

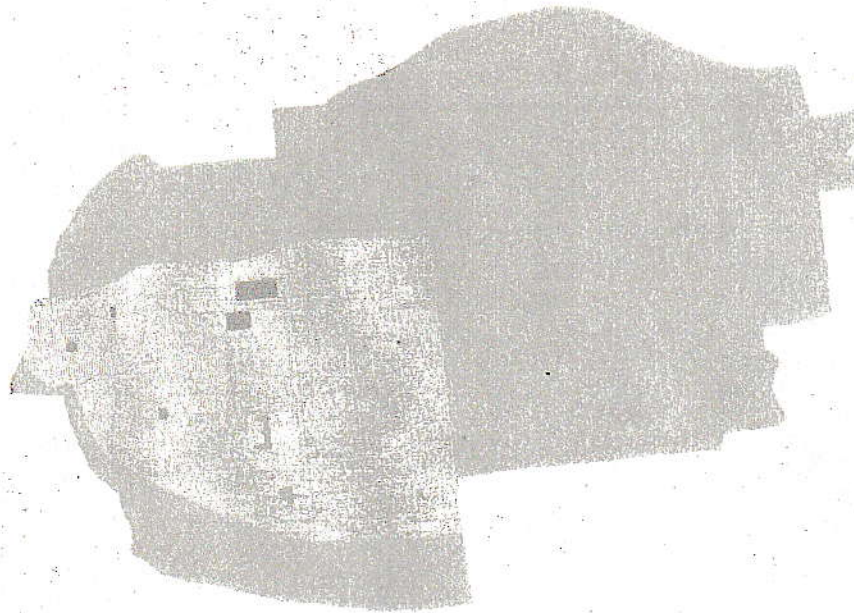
②0伊賀上野城下町の文化的景観

20世紀遺産・20選
ICOMOS ISC20c
Japan

伊賀上野城下町の文化的景観	(Ⅴ)、(Ⅳ) [旧城下町の都市景観にあわせた近現代建築群の代表例]
所在地	〒518-8501 三重県伊賀市上野丸之内116番地
位置	北緯34度76分8.6秒 東経136度12分9.8
構成資産	・ 史跡上野城とその城下町 俳聖殿 (1942) 伊賀文化産業城 (1935) 他 ・ 近代現建築群 旧上野市庁舎 (伊賀市南庁舎 1964) 白鳳公園レストハウス (1963) 上野西小学校体育館 (1966)
設計者、竣工年等	近現代建築群の設計者： 旧上野市庁舎 坂倉準三建築研究所 (建築)、平田建築構造研究室 (構造)、桜井建築設備研究所 (設備) なお、白鳳公園レストハウス、上野西小学校体育館も坂倉準三建築研究所
備考 (登録文化財、重要文化財等)	コアゾーンに重要文化財俳聖殿 (設計：伊東忠太 他)、伊賀文化産業城 (市指定 木造天守)、城下町内に登録有形文化財等約10件

②伊賀上野城下町の文化的景観

20世紀遺産・20選
ICOMOS ISC20c
Japan

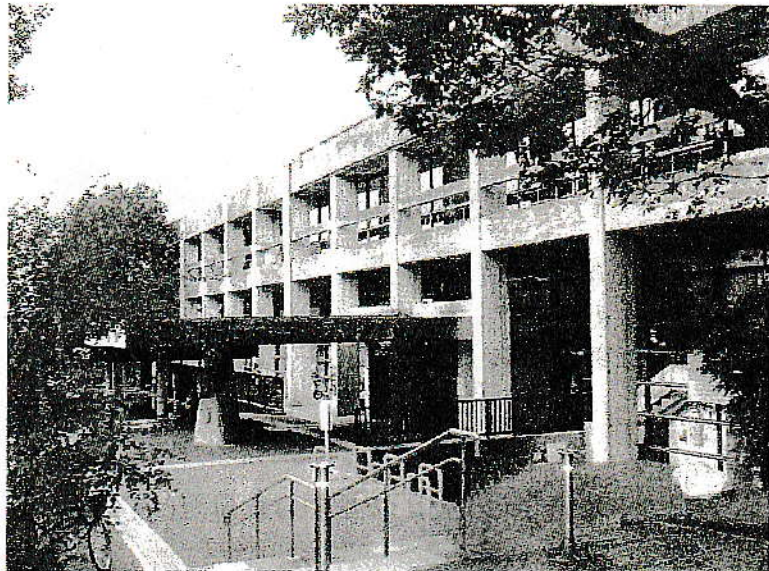


コアゾーン
史跡上野城
旧上野市庁舎周辺
旧城下町周辺

対象施設
旧上野市庁舎他近代建築群
俳聖殿
伊賀文化産業城
他

バッファゾーン
史跡上野城周辺
城下町周辺

1. 伊賀市庁舎(旧上野市庁舎)



昭和 39 年(1964)完成

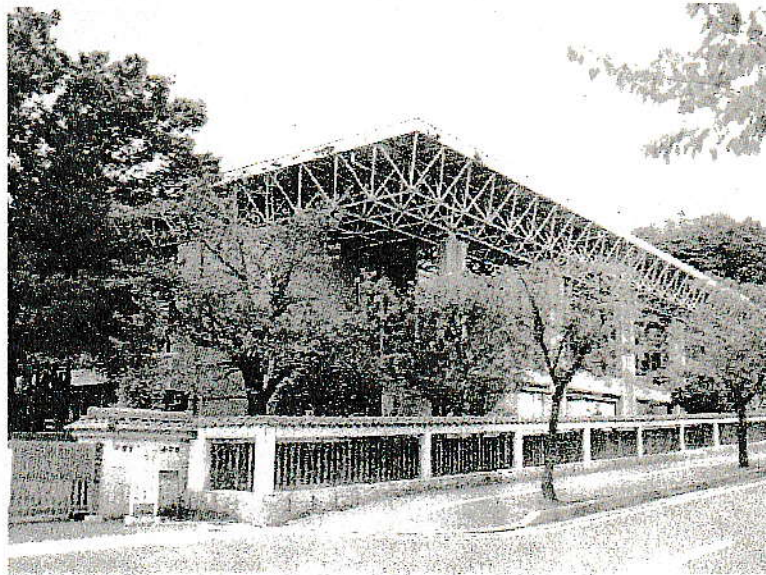
鉄筋コンクリート造 3 階建

設計 坂倉準三

上野公園の裾に建つ一連の坂倉準三建築群の一棟。当時の上野市長豊岡益人の発案で、上野市役所の他、三重県上野分庁舎、上野市公民館、上野市立西小学校、上野市立崇広中学校、上野公園レストハウスが建設された。それらの内現存するのは、本建物と西小学校体育間、上野公園レストハウスのみである。坂倉準三は、世界的建築家ル・コルビュジェのもとで学んだ日本のモダニズム建築の先駆者で多くの作品を残したが、建築群として存在するのはここだけである。コンクリートとガラスと鉄の素材感をシンプルに表現し、城山の麓の景観に調和させている。

参考 建築家坂倉準三「モダニズムを生きる | 人間、都市、空間」

2. 上野西小学校体育館



昭和 41 年(1966)完成

鉄筋コンクリート造 2 階建

設計 坂倉準三

上野西小学校校舎は昭和 37 年(1962)に完成し、引き続き体育館が建設され 4 年後に完成。校舎は平成 7 年(1995)に建替えられたが、体育館と渡り廊下は存続している。一連の坂倉作品と同様にコンクリート打放しで、屋根は当時斬新であった鉄骨の立体トラスで構成されている。軒の出が大きく深い陰影を醸す。そのおかげでコンクリートは美しい表情を保っている。ここでも国立西洋美術館のディールが採用されている。

参考 近代建築 1965.9「伊賀上野と共に歩んで」西澤文隆

3. 白鳳公園レストハウス



昭和 38 年(1963)完成

鉄筋コンクリート造 1 階建

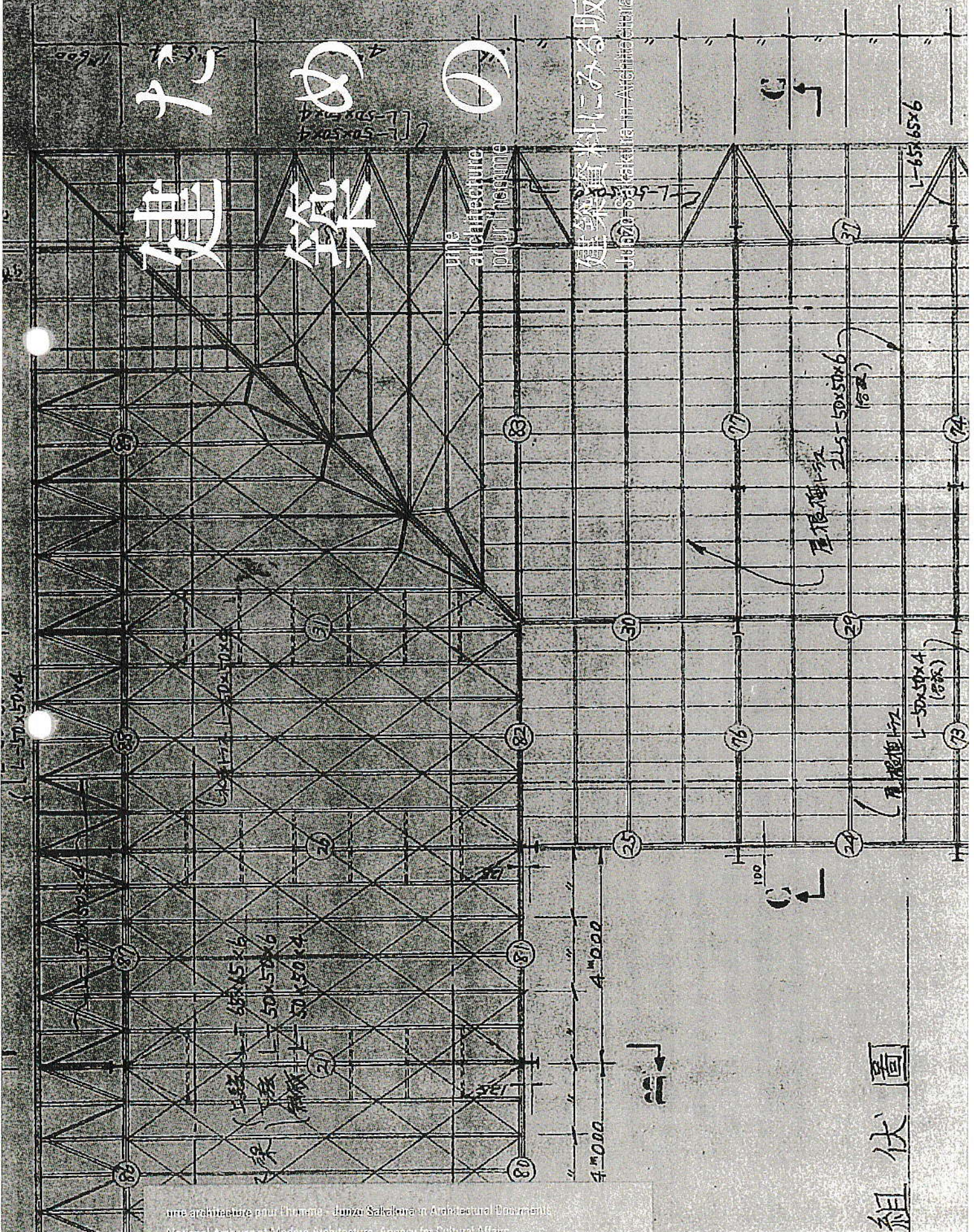
設計 坂倉準三

上野市観光協会の依頼によって、上野公園の一角にレストハウスと公衆便所が計画された。特徴的な傘型の建物は APOLO 興産の一連のスタンドで採用されたデザインを発展させたのとも考えられる。公衆便所は公園の傾斜を利用し半地下とし、視界に入らないよう工夫し、その屋上は展望台としている。傘型のデザインは上野西小学校の渡り廊下と共通している。

参考 近代建築 1965.9「伊賀上野と共に歩んで」西澤文隆

人間の ため の 建築

建築資料にみる坂倉準三
Junzo Sakakura in Architectural Documents



朝のニュース番組で、坂倉準三の作品を目にすることがある。渋谷の《東急会館》の映像である。恐らく無意識のうちにも多くの日本人の記憶に潜んでいる建築であろう。

鎌倉の《神奈川県立近代美術館》以降も坂倉は、家具、住宅、建築、都市など幅広い対象物を同時並行でつくり続けた。渋谷、新宿や難波のターミナルをはじめ、各地の庁舎、民間の建築群は都市の「風景」として頼まれてきた。

難波の《南海会館》、渋谷の五島プラネタリウム＝《東急文化会館》などは姿を消したいまでも当時を知る人々に強い印象を残している。これに対し《新宿西口広場》は現在も日本一の乗降客数の駅を支える空間としての存在感を保っている。

姿を消していく建築がある一方で、文化的建造物として再生される作品も徐々に増えつつある。《神奈川県新庁舎》は平成28年度完了を目的に再生計画が進行中であり、《上野市庁舎》もすでに保存に向けた構想段階に入っている。その際には現存する建築資料が再生のための貴重な手掛かりとして重要な役割を担っている。

坂倉準三が日本の都市に与えた影響は計り知れないが、そのあり方はモニュメンタルと言うよりもむしろ自然でかつ親密さをともなっている。50年を超える時を経たいまもなお、古びた印象がないことも坂倉作品に共通する特徴である。

これは、その精神と方法論が時代の新旧を問わず人の共感をえる全体性を備えているためであろう。

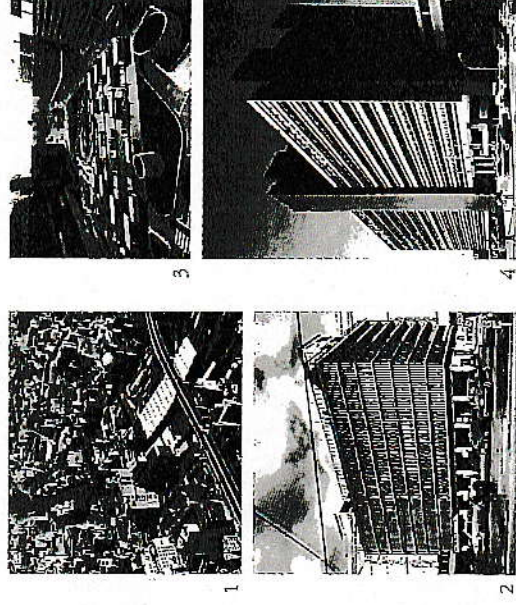
その手がかりとして、以下に、東京の都市計画について述べた坂倉準三のテキストを紹介したい。

私が常に思うのは、これらの壮大な計画の立案者たち、またこれを支持するジャーナリズムは、本当に今の東京がこれらの計画によって救われると考えているのであろうか、ということである。これらの大計画が社会に与える積極的なプラスの面については、今までしばしばいろいろの観点から解説されているし、それを私自身も全面的に否定するわけではないが、いやむしろ支持すべきところのあることを認めるのにやぶさかではないが、しかし、それ以外の計画が全然あらわれないのはどうしたことであろう。大東京に集り、ここに働く多くの人たちは今救われることが大切であって、いきなり50年の将来のことをわれこそは将来にたいす先の見の明があるということを誇示するような大計画だけではどうにも救われようはないのである。

われわれ建築家、都市計画家は市民の一人として、今日に密着した改造計画をも合わせて考えて考える社会的義務があるのではないか。敢えて市井の問題を取り上げた次第である。

「緑したたる大東京計画——ここに働く人たちによるこびを与えるための改造計画にふれて」『建築東京』1966年8月号、東京建築士会

「まんがいち、やすむろ／建築家、坂倉建築研究所」



1 《渋谷計画》鳥瞰写真 | Shibuya Development and Project
2 《東急文化会館》 | Tokyo Bunka Kaikan
3 《新宿西口広場》 | West Plaza of Shinjuku Station
4 《神奈川県新庁舎》外観
Kanagawa Prefectural Government New Building

One can see the work of Junzo Sakakura in the morning news from time to time, when images are shown of the *Tokyo Kaikan* in Shibuya. It is a building that probably lies subconsciously in the memory of many Japanese.

After making *the Museum of Modern Art, Kamakura*, Sakakura continued to produce works concurrently in a wide range of subjects, from furniture to houses and architecture to the city. His works – such as the terminal buildings in Shibuya, Shinjuku, and Namba, the government buildings throughout the country; and the numerous privately-owned buildings – have always been seen as familiar elements in the urban landscape.

Works that have disappeared, such as the *Nankai Kaikan* in Namba and the Goto Planetarium (*Tokyo Bunka Kaikan*) in Shibuya, have left strong impressions that are still retained by those who remember the days past. Meanwhile, there are works such as the *West Plaza of Shinjuku Station* that still maintains a strong presence as a space supporting the station that is used by the most number of passengers in Japan today.

While there are buildings that are disappearing on one hand, there are also an increasing number of works that are being revived as cultural buildings. The *Kanagawa Prefectural Government New Building* is currently undergoing a renewal plan that aims to be concluded in 2016, and a project to preserve the *Ueno City Hall* is also already in the midst of its planning phase. The existing architectural documents of the buildings are playing an important role in these processes by providing valuable guidance for the restoration work.

The influence that Junzo Sakakura has had on Japanese cities is immeasurable, though his work is better described as natural and intimate rather than monumental. Another common trait of Sakakura's work is that it does not give the impression of being antiquated even after the passing of over 50 years. This must be because it reflects a spirit and

methodology that retains a sense of integrity congenial to all regardless of the age in which it was made.

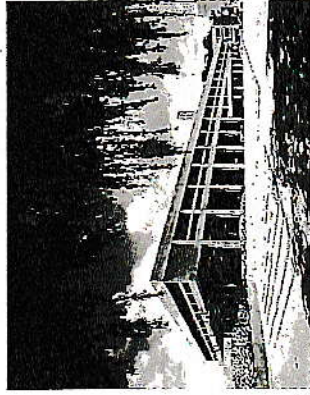
This is evidenced by the following text written by Junzo Sakakura about the urban planning of Tokyo.

I always wonder whether the proponents of these grandiose projects—and the journalism that supports them—truly believe that Tokyo of today will be saved by such plans. The proactive, positive effects that these grand plans will have on society have already been explained time and again from various perspectives, so it is not as if I am rejecting them entirely. Indeed, I am not reluctant to admit that there are points that are worthy of support. Yet, what is to be made of the complete absence of any other plans? What is important for the many people who have gathered to work here in Great Tokyo is that they are helped right now; there is no way that they can be saved solely by grand plans that proclaim to have a great foresight abruptly in regard to the future 50 years from now.

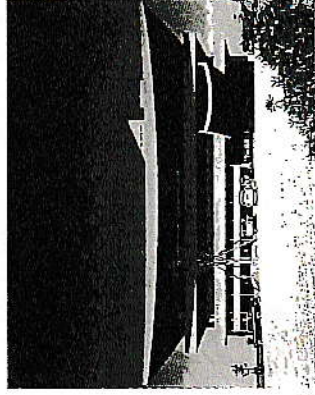
Do we architects and urban planners, as citizens, not have a social obligation to think also about making restructuring projects that are more closely in touch with today? It is in this view that I have here now deliberately addressed this issue on the street.

Midori shitaru dai tokyo keikaku. Koko ni bataraku hito tabi ni yoroboi iwo ataru tame no kaizo keikaku ni surete (The verdurous grand plans for Tokyo: On the restructuring projects for bestowing happiness upon the people who work here) [*Kenchiku Tokyo*. August 1966. Tokyo Society of Architects & Building Engineers.]

[Architect, Sakakura Associates architects and engineers]



5



6

5 《上野市庁舎》外観 | Ueno City Hall

6 《枚岡市庁舎》外観 | Hiraoka City Hall

The background of the entire page is composed of faint, detailed architectural drawings. On the left, there is a large-scale site plan or map showing a river, roads, and various building footprints. On the right, there are more detailed architectural sections and elevations of buildings, showing structural elements like roofs, walls, and windows.

平成30年度 収蔵品展
Collection Showcase 2018

建築からまちへ 1945-1970

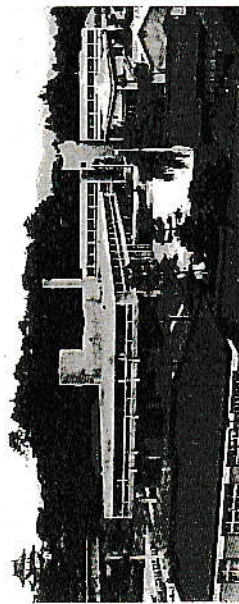
From Architecture to Urbanism 1945-1970

戦後の都市へのまなざし

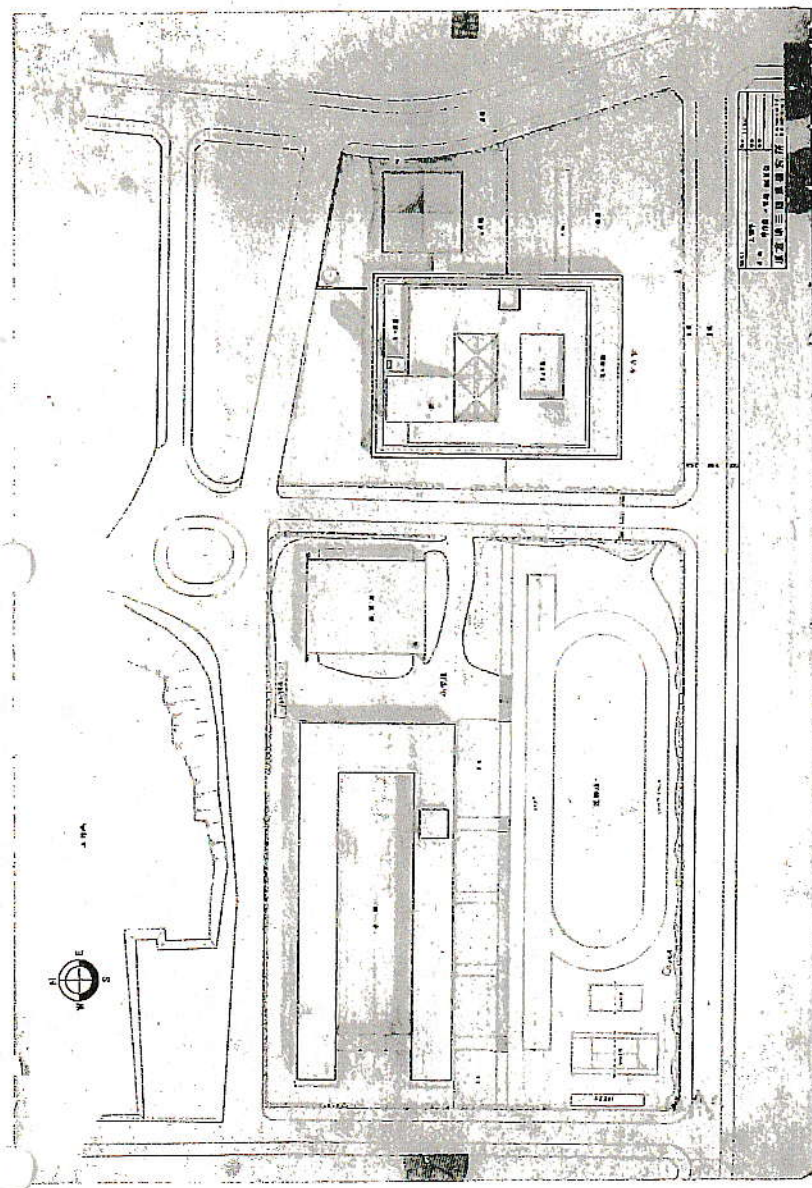
Perspectives on Urban Design in the Postwar Era

上野市全体計画 三重県伊賀市 1959-1966年 Ueno Comprehensive Plan/Iga,Mie

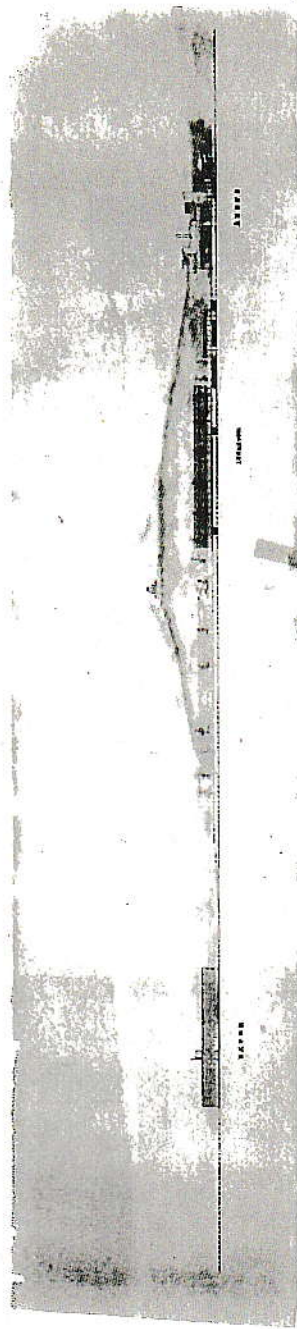
現在、周辺の3町2村と合併し伊賀市となった旧上野市は藤堂高虎の築城以来、伊賀上野藩の城下町として栄えた。碁盤状に区画され整然とした街並みの中心に城址があり1935年には復興天守が建設される。上野公園として整備された城山の南麓に坂倉準三によって1964年に「上野市庁舎」が完成する。これを中心に「市民館」「市立西小学校」「市立崇広中学校」「三重県上野分庁舎」「市白鳳公園レストハウス」が建設される。市庁舎は一部中2階を含む二階建てで、東西方向に壁柱が配置され立面にリズムを与えている。水平性の強いボリュームの市庁舎を中心とした〈シビック・センター〉地区は、こもりした城山と対比をなして、低層建築でありながらシンボル性を生みだしている。[Y]



12 通称からまちへ1945-1970 戦後の都市へのまなざし

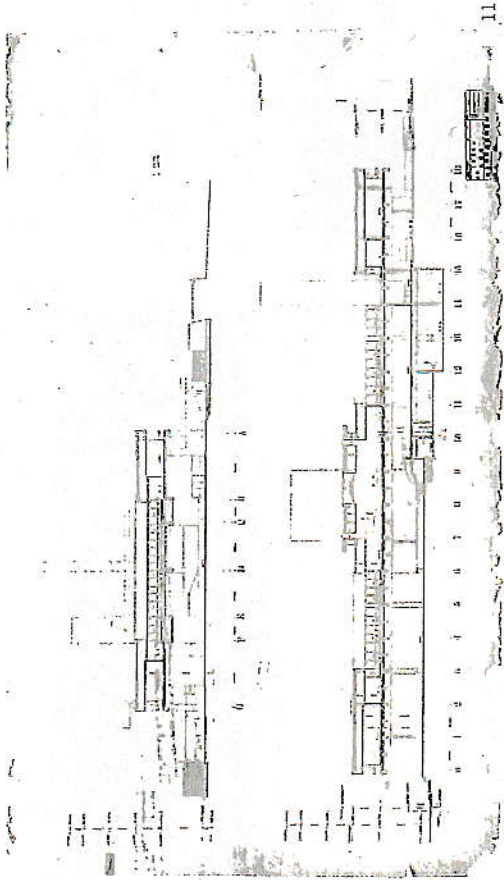


9

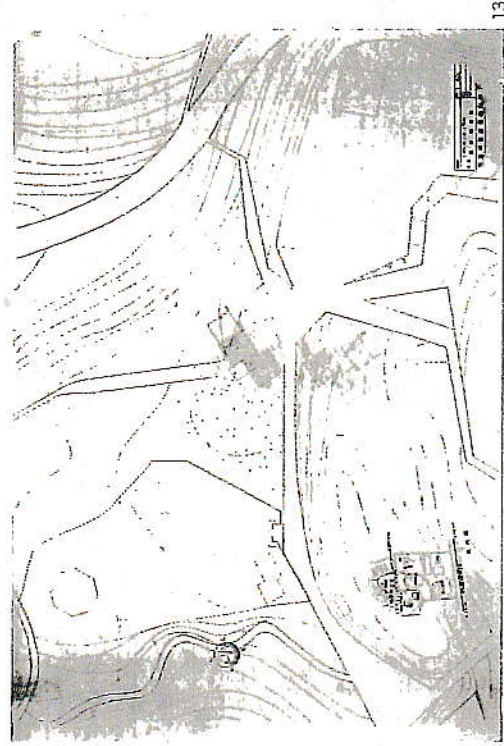


10

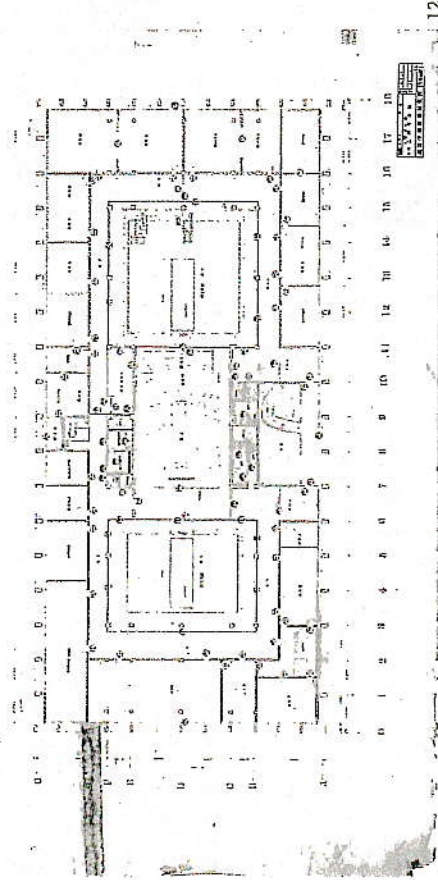
8. 俯瞰 | 1965年頃 | 新建築社写真部
Aerial View | c.1965 | Shinkenchiku-sha
9. 市庁舎 小学校 配置図 | 図面 | 1:400 | - | 鉛筆 インク、トレーシングペーパー | 548x799
City Hall and Elementary School, Site Plan | drawing | 1:400 | - | pencil and ink on tracing paper
10. 全体立面図 | 図面 | - | - | 鉛筆 インク、トレーシングペーパー | 300x1330
Full Elevation | drawing | - | - | pencil and ink on tracing paper



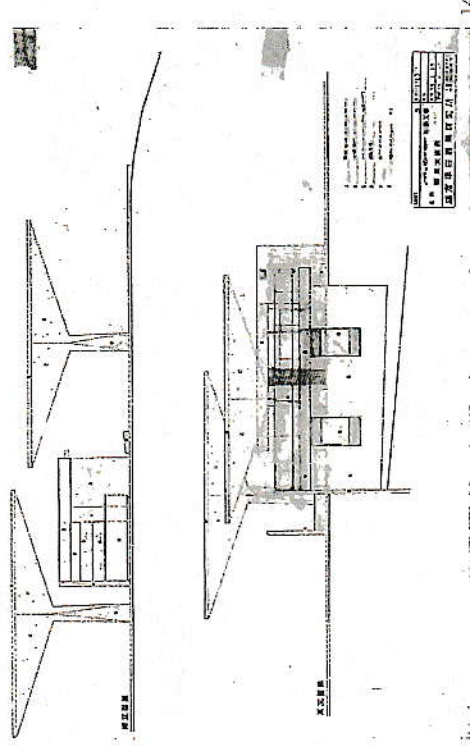
11



13



12



14

11. 上野市庁舎 断面図 | 図面 | 1:100 | 1963年12月11日 | 鉛筆 インク、トレーシングペーパー | 671×1145
Ueno City Hall, Section | drawing | 1:100 | 1963.12.11 | pencil and ink on tracing paper
12. 上野市庁舎 二階平面図 | 図面 | 1:100 | 1963年11月13日 | 鉛筆 インク、トレーシングペーパー | 657×1098
Ueno City Hall, Second Floor Plan | drawing | 1:100 | 1963.11.13 | pencil and ink on tracing paper
13. 上野市白鳳公園レストハウス 敷地配置図 | 図面 | 1:300 | - | 鉛筆 インク、トレーシングペーパー | 552×804
Ueno City Hakuho Park Rest House, Site Plan | drawing | 1:300 | - | pencil and ink on tracing paper
14. 上野市白鳳公園レストハウス 南東立面図 | 図面 | 1:100 | 1963年1月18日 | 鉛筆 インク、トレーシングペーパー | 401×554
Ueno City Hakuho Park Rest House, South and East Elevation | drawing | 1:100 | 1963.1.18 | pencil and ink on tracing paper